

2006/11/19 講道館杯にて・ルネッサンススピーチ

濱田初幸

ただいま紹介を頂きました、鹿屋体育大学の濱田です。

私は去年約 1 年間、フランス、ドイツに留学する機会を得ましたが、その時、感じたことを話させていただきます。

私の研究テーマは「ヨーロッパにおける武道調査」でした。滞在中、フランス柔道界で耳にした聞き慣れない二つの言葉を紹介したいと思います。その言葉とは「M・O・N・D・O・U」と「クラシック柔道」という言葉です。

ご存知のように、フランスは登録人口約 60 万人を有していて、我々日本の 20 万人をはるかに凌ぐ柔道大国です。人口比からすると我が国の 6 倍に相当し、フランス・スポーツ登録人口ランキングはサッカー、テニスに次いで 3 番目にランクされています。サッカー、テニスはプロ化されていますので、アマチュアスポーツ団体の中では、柔道が人気ナンバー 1 と言われています。

滞在中に何度となく、フランス柔道連盟のトップ会議にオブザーバーとして出席するチャンスを得ました。その中で、フランス、ルネッサンス会議にも出席させて頂きました。フランスでもルネッサンス活動は注目を浴び、積極的に活動しています。その会議の中で、スライドに「M・O・N・D・O・U」と表記された言葉が何度も出てくるのですが、辞書を調べてもわからないので、委員の一人に MONDOU って何かと質問をしました。すると「わからないのか」と不思議な顔をされましたが、彼が説明しているうちにハタと気が付きました。彼らが盛んに話していた言葉の問答は、実は「禅問答」の問答でした。フランスでは柔道指導方法の領域の中に、この問答が正式に採用されているのです。問答の中で、指導者が「生き方」や、「考え方」、「世の中で今起こっていること」を子どもたちに話しをしたり、あるいは質疑応答しながら、柔道を通して人作りを行っているのです。

実は、この「問答」は嘉納師範も稽古終了後、指導法の一環として行っていました。また、昭和 11 年公布の学習指導要領なるものには、柔道が必修科目であり、その指導項目の中に「講話」として、この「問答」に匹敵するものが正式に明記されていました。そして現在、日本で忘れられているやも知れない「MONDOU」がフランスで受け入れられ、柔道を通しての人作りのための指導方法となっているのです。彼らもまた、柔道と他のスポーツとの違い、相違点は教育にあると強く考えています。

滞在中にフランス柔道指導者を対象にアンケート調査を行いました。指導者のうち、約 40%の人が、柔道には教育的効果があると認識しているデータを得ることができました。我々が忘れかけていた、「問答」をフランスの柔道指導者が大切にしている、指導プログラムの中に取り入れていることを深く受け止

め、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

後一つの言葉、これはフランスに限らず、欧州全体の傾向なのですが、日本人の柔道スタイルを「クラシック柔道」と呼んでいます。両手を握り、しっかり組んで戦う柔道を「クラシック柔道」と呼んでいるのです。フランスはアテネオリンピックの惨敗から、この「クラシック柔道」を見直し、取り入れようとしているのです。一方、これまで積極的に取り入れていた柔道を、「クロス柔道」とか、「ロシアン柔道」と呼んでいます。クラシックと言う言葉に、私は少し引っかかり、何がクラシックか、俺達の柔道は古くないぞ、正しい柔道と言うんだと、やや反論していましたが、話している内に、彼らの言っているクラシックは、ただ単に古いという否定的な考え方ではなく、「伝統的で正しい柔道」で尊敬の意味を込めて言っているんだと気付きました。

今日の試合でも国際大会でも、コーチからのアドバイスは「二本持て、両手でしっかり持て」と言っているのを良く耳にすることがあります。世界で認知されるまでには、少し時間はかかりましたが、引き手と釣手を持って戦う柔道の大切さに、外国の指導者が気付き始めて来ています。時代やルールが変わっても、基本である正しい柔道は不変的なものであることを感じました。勿論、変えなければならないものもあるでしょう。

その一方、変えてはならないものも多くあるのです。

ヨーロッパで柔道を愛する人たちの問答を通しての人作りや、両手を握って柔道をする、そういった柔道の原点に戻ろうとする姿勢が将来の柔道の発展に繋がると考えています。

私は忘れかけていた「問答」と言う言葉から、人づくりの大切さ、精神性の重要視と観点から実践していかなければならないことを、改めてフランス柔道界から教えられた気がします。

また、「クラシック柔道」からは、どうすることが柔道の技術面や競技力向上、あるいは魅力に繋がるかを確認することができました。

このように日本で生まれた柔道が、世界で受け入れられているように、日本人として世界に誇れる多くのものがまだまだあるような気がします。

「日本人の良さを知らない日本人」、そんな言葉も耳にすることもあります。

映画「ラストサムライ」が欧米でヒットしたり、藤原正彦氏の「国家の品格」がベストセラーになったり、新渡戸稲造の「武士道」、宮本武蔵の「五輪の書」などの武道論的な書が書店の店頭で多く見かけられるようになったことから、今、「日本の原点に戻ること」、「日本人の文化価値を見直してみること」、柔道に限らず、教育の問題も含めて、多くの分野で求められているのではないでし

ようか。

我々が愛している柔道は、日本人らしさを持ち、かつ、日本から発信して、世界に受け入れられている「日本の重要な文化」であると考えています。私のような地方にいる者でも柔道を通してなら、微力ながらも国際貢献に関わることが出来ます。この、世界で受け入れられている柔道の持つ素晴らしさ、魅力をもっと多くの日本人に理解していただき、柔道がもっともっと盛んになることを期待しています。

それを担っているのは、今回出場した選手やそれを支えている仲間であり、また我々指導者、そして観覧していただいている柔道ファンの皆さんではないでしょうか。

私が不思議な響きで感じた、「問答」と「クラシック柔道」という言葉から、今一度皆さんで柔道のあり方を、時間のある時にでも考えてみてもらいたいなど、そんなことを提言して私のスピーチとさせていただきます。